

鳥取の映画文化の幕開け

鳥取キネマリーグ
第一回集會

好き映画鑑賞會
よき映画を鑑賞する目的で本春組織した鳥取キネマリーグは、いろいろの都合でその集會はノビノビとなつてゐたが第一回集會を一月二十七日午後七時から世界館前山商店樓上で開會した。参会者は三十五名の盛會で尾崎坡醉氏は同會組織の経過並に池田時報記者の將來の目的等について述べ、來春一月よりキネマリーグ會報發行の件、會員券發行方法及び同會推薦映画等を協議した。次回集會は十二月十五日午後七時から場所未定であるが、今回の研究議題は英百合子と砂田駒子、阪東妻三郎と河部五郎の比較研究並に松竹と日活映画の藝術的価値の比較研究等である。尚入會希望者は世界館及び帝國館の窓口にて一箇月四回觀覽料一圓四角十錢を納入して會員章を受領されたいと。

『鳥取新報』大正15年11月29日(鳥取県立図書館蔵)★

鳥取キネマリーグ
第一回集會
好き映画鑑賞會

よき映画を鑑賞する目的で本春組織した鳥取キネマリーグは、いろいろの都合でその集會はノビノビとなつてゐたが、第一回集會を一月二十七日午後七時から世界館前山商店樓上で開會した。参会者は三十五名の盛會で、尾崎坡醉氏は同會組織の経過並に池田時報記者の將來の目的等に就いて述べ、來春一月よりキネマリーグ會報發行の件、會員券發行方法及び同會推薦映画等を協議した。次回集會は十二月十五日午後七時から場所未定であるが、今回の研究議題は英百合子と砂田駒子、阪東妻三郎と河部五郎の比較研究並に松竹と日活映画の藝術的価値の比較研究等である。尚入會希望者は、世界館及び帝國館の窓口にて一箇月四回觀覽料一圓・會報十錢を納入して會員章を受領されたいと。

映画は明治中期に日本に伝えられ、1903(明治36)年には浅草の電気館が映画興行専門館となり、日本初の映画館が登場した。明治・大正期のうちは活動写真とよばれ、無声映像を講釈士が説明する形式の話芸が通常で、新しいメディア体験の面白さを知った観客の支持を受け、大正末期から観客数が急増する。経済的基盤を支えるに十分な観客層を獲得することで、映画は全国レベルで民衆娯楽としての普及を達成、また昭和初期にトーキー(音声の出る映画)も伝わり、コンテンツ製作においても評価され得るレベルの国産の映画作品も登場し、製作から興行までの産業全体が成長を遂げることになる。そしてトーキー化を契機とし、中小のプロダクションが連立して製作されていた日本の映画産業は、巨大資本の映画製作会社によってより多くの観客を動員するというビジネスへと変貌を遂げていく。

資料は1926(大正15)年の『鳥取新報』に掲載された記事である。それまで文芸に熱中していた青年層が、流行とともに一気に映画へ活動の場を移したことがうかがえるものである。「キネマリーグ」という組織を立ち上げ、映画の比較研究、芸術的価値について議論を行っていかうとしていたことを伝えている。

(担当：前田孝行)